

## 令和3年度 愛媛県立松山北高等学校第73回卒業証書授与式 式辞

令和4.3.1

校庭の木々も冬を乗り越え、足元や庭木の先がほんのりと薄緑に芽吹き、北斗園の梅の花もほころび、春の訪れを感じる今日の佳き日に、同窓会会長 関谷勝嗣様、PTA会長 重見時善様の御臨席を賜りますとともに、コロナ禍で保護者の皆様のご案内さえも危ぶまれましたが、多数の皆様にご出席いただき、愛媛県立松山北高等学校第73回卒業証書授与式を挙行できますことは、この上ない喜びであり、深く感謝申し上げます。

本日、松山北高校は、356名の卒業生を送り出すこととなりました。卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。在校生、教職員、また、長井前校長や旧教職員の皆様とともに、心からお祝い申し上げます。

また、保護者の皆様におかれましては、本日、お子様の晴れの姿をご覧になり、感慨ひとしおのものがあろうと拝察いたします。社会全体が新型コロナウイルス感染症により不安に包まれる中であっても、これまで子供の成長を第一に願い、いかなる労をも惜まず、ともに汗を流し、時には励まし、慈しんでこられたご家庭における子育てのご努力と愛情の深さに、尊敬の念を抱きますとともに、ご卒業の日を迎えられましたことに対し、衷心よりお喜びを申し上げます。

卒業生の皆さんは今、松山城を仰ぐこの文京の地で心躍る学び合いを通じて、たゆまぬ努力を重ね、勉学にスポーツに文武両道を実践し、また人格の向上に精一杯努めながら「心」を磨いてきました。私は一年間ではありましたが、正門や3年生の教室がある第一教棟で皆さんと出会う朝の風景は新鮮で気持ちよく、楽しい時間を過ごすことができました。3年生の皆さんから感じる若さ溢れるエネルギー、また、少しずつ大人へ成長する姿や表情の全てがうらやましく、私自身にとっては感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。皆さんは、今、次のステージで始まる新しい生活に向けて、自分自身に対する可能性や期待で鼓動が高鳴るのを感じていることと思います。皆さん一人一人が次世代を担い、社会に大いに貢献する人材であると大きな期待を抱いています。

さて、昨年9月に松山北高等学校120周年記念式の記念講演で昭和54年第30回ご卒業の直木賞作家、天童荒太さんから「生き延びるためのヒント」と題して、皆さんからの多くの質問に対して、自らのご経験に基づき、貴重なお話をいただきました。その中の一つに「好きな言葉、また座右の銘を教えてください。」という問いに対して、『言葉にして心がけていることは、わたしの視界に入ったゴミは、わたしが拾わなければ誰かが拾わなければいけない。また台所の流しに置かれた汚れ物の皿やコップは、私が洗わなければ誰かが洗わなければいけない、ということです。あと、二つの道のどちらを選ぶか迷った時は、きっとより大変そう、より陰しそうな道を選ぶという決め事もしています。陰しい道の方が、最終的にはよい結果

が得られたことが多いです。そもそも迷っている段階で険しい道の方がいい結果につながると自分で分かっている。もしかしたら、楽な道を選んでもいい結果につながるのではないか、という「甘え」があるから迷うのです。だから迷った時は、険しい道の方と自分に言い聞かせています。』という答えをいただきました。まさに、本校の校訓「文・武・心」の「心」に響く、私たちが選択すべき行動のヒントを教えてくださいました。皆さんは記憶に残っていますか。天童先生からは、その他にも多くのヒントとなる回答を心を込めてお話しいただきましたが、その全文は、生徒会誌「北斗」で紹介されていますので、卒業生だけではなく、在校生の皆さんも自分に合ったキーワードを見つけて、今後皆さんが悩んだり迷ったりした時の道標となるように願っています。

卒業生の皆さんを待っている現代の日本社会は今、大きな転換点に立っています。デジタルトランスフォーメーションやグローバル化、そして地球環境問題に加えて、世界紛争などが、これまで以上の速さで進行することが予測されるとともに、不確実性、複雑性、曖昧性の時代と称されるように、予測が困難な未来を迎えようとしているからこそ、皆さんは、未来志向の対応策を創り出すことはもとより、失敗に対して批判するだけの人になってはいけません。他者への共感、更には多様性を尊重する態度、異なる考えの人々と議論を重ねながら問題を解決していく力を身につける必要があります。このような時代にこそ、皆さんが松山北高校の校訓「文・武・心」三道三立を目指して培った「人」としての総合力で、現代の「坂の上の雲」に向かって、大いに険しい道からチャレンジし、チャンスを手掴んでくれることを期待しています。

皆さんには、本校の卒業生として、誇りをより強く持ってもらうため、明治の詩人、与謝野晶子が歌集『草の夢』で詠んでいる歌を送りたいと思います。

「劫初より つくりいとなむ殿堂に

われも黄金（こがね）の 釘一つ打つ」

松山北高等学校が創立されてから、諸先輩の方々が築き上げられ、支えてこられた本校120年の歴史ある殿堂に、皆さん一人一人もその「つくり営む」同窓の一人として、本校の長い伝統の中にあっては、たった一本の釘を打つことぐらいの小さな存在かもしれないけれども、その一本は、紛れもない価値を持つ「黄金（こがね）」の釘である、と皆さん一人一人が自負して卒業していただきたい。

結びに、本日、松山北高等学校を巣立ってゆく356名、そして皆さんと同じ日に入学し、共に3年間学び、本日後方で出席してくれた佐川陸さんを加えた357名の、努力と新しい門出に向かう晴れやかで凜とした姿に拍手を送るとともに、357通りの輝かしい未来を心から祈って、式辞とします。

令和四年三月一日

愛媛県立松山北高等学校長 友澤 義弘